

3-3-2 高原道、中尾峠

① 高原道の概要

高山から平湯へは平湯街道だが、平湯で安房峠を越えて信州への道と、北方向に折れて神岡方面に向かう高原道があった。現在、旧街道沿いに国道 471 号が走っている。

この街道は金森時代以前の街道で、信州—安房峠（または中尾峠）—高原道—神岡—越中の道程が知られる。沿線集落の寺院は曹洞宗が多く、神岡の江馬氏ゆかりの寺が並ぶ。北方向に進んで福地の先、栃尾で東に進むと蒲田、中尾、中尾峠、上高地、嶋々へとつながってゆく。

また、北方向に進んで、見座集落で西方向に折れると本郷平を経て蔵柱、荒原に至る。荒原で越中東街道に接続する。

さらに高原道をもう少し北方向に進んで、中山に至り、東に折れて双六を経て山吹峠を越え、神岡の山之村へとつながる。

② 中尾峠へ

江戸時代の中尾峠への道は福地を過ぎて栃尾で東へ折れ、蒲田を経て中尾の川原沿いに着く。現在の道路は県道 475 号で、おおむね旧街道に沿っている。県道 475 号からかなり下に降りたところで、わかりにくいところだが、かつて中尾口留番所の跡がある。

現在の道路は奥飛騨砂防資料館の三差路で東南方向に坂を上がり中尾集落（温泉）に着き、そこから焼岳方面へ上がると中尾峠に至る。中尾峠への道は急坂な登山道で、江戸時代に中尾峠を越えて上高地へ降りた厳しい道のりが知られる。

中尾峠には現在焼岳小屋があり、南西方向に登山道を登ると焼岳頂上に至る。

③ 見座から国府八日町への道

高原道の見座から西へ折れ、河岸段丘の宮原、本郷へと進み、蔵柱、荒原へ西進して荒原の西側で越中東街道に合流、南下すると国府町の八日町集落へとつながる。

国府～見座までの現在の道路は、県道 76 号になっていて、道路改良工事が進んでいる。高山市街地から上宝支所へ行くにはこの県道が使われる。

④ 中山から山之村への道

高原道上、中山から北へ折れて双六、金木戸、森茂（山之村）に至り、下之本、打保、有峰へとつながる。有峰方面には鎌倉街道といわれる古道が伝承されている。

⑤ 高原道と枝道の道筋と見所

平湯 — ア 一重ヶ根 — イ 福地 — ウ 栃尾 —
（エ 中尾峠へ） — オ 今見 — カ 田頃家 —
キ 笹嶋 — ク 長倉 — ケ 岩井戸「杓子の岩屋」 — コ 見座 — サ 中
山、双六 — シ 神岡東町
（越中東街道に接続）

⑥ 高原道の集落

ア 一重ヶ根（ひとえがね・奥飛騨温泉郷一重ヶ根）

『後風土記』によると家数三十九軒、黍（きび）やガマハバキなども産出した。一重ヶ根温泉として古くから開かれ、元禄三年には円空が訪れたと伝わる。現在は新平湯温泉という。臨済宗妙心寺派の禅通寺がある。

イ 福地（ふくち・奥飛騨温泉郷福地）

国道 471 号から西に折れて進むと福地に至る。

地名の由来は『後風土記』によると、正月に耕地の根雪の上に平湯川の水を引いて雪を溶かすと、その温気で麦が豊かに実ることによるという。

現在福地温泉があり、温泉旅館が営まれている。

ウ 栃尾（とちお・奥飛騨温泉郷栃尾）

一重ヶ根を過ぎて、高原川の手前が村上集落で、蒲田川の「たからはし」を渡ると栃尾集落に至る。栃尾小学校があり、右に折れると県道 475 号で、中尾、新穂高温泉に至る。

地名の由来は、当地の山の尾に栃の大木があったことによるという（『後風土記』）。『国中案内』によると家数は七軒。

エ 中尾峠へ

栃尾から県道 475 号を東へ進むと栃尾温泉、神坂（かんさか）、中尾に至る。途中、神坂には「中尾口留番所」の跡があり、高山市の文化財（史跡）に指定されている。そこから東南方向に進んで高台の中尾温泉に着く。江戸時代の中尾峠へは、中尾温泉地区を通過して、東南方向に登山道をどんどん登り、中尾峠へと通ずる。現在の登山道と江戸時代の街道は、何カ所かで切り替わっているところも見られる。『国中案内』によると中尾村の家数は十四軒である。

〈中尾峠〉（上宝町中尾、長野県松本市安曇）

標高二一五〇メートル、松倉城主三木秀綱と奥方は信濃に落ちのびるとき、この峠を越えて上高地へ降りて、奥方は徳本（とくごう）峠方面へ、秀綱は角ヶ平方面へと分かれたという。また、弘化三年（一八四六）八月に高山の僧侶が女性と密通して信州へ逃げてゆくとき、左官の江戸屋万蔵外三人が、あとから追いかけた。中尾村新道で話がこじれて、江戸万が打ち殺されてしまう事件があった。『上宝村史上巻』平成十七年上宝村村史刊行委員会発行 四一八頁」より

オ 今見（いまみ・奥飛騨温泉郷今見）

南向きの斜面に集落があり、江戸時代には煙草を栽培していた。また、サンショウの産地で「今見山椒」といわれて著名であった。現在も特産となっている。

旧家今見右衛門の姓が村名になった。

カ 田頃家（たごろけ・奥飛騨温泉郷田頃家）

『後風土記』によると、村名の由来は、古来より桶を作って売っており、「たがの桶」がなまって「たごろけ」になったという。

『国中案内』によると家数は二十四軒である。

煙草や藍など多種の特産品が産出されていた。

キ 笹島（ささじま・奥飛騨温泉郷笹島）

村名は笹が生い茂って島をなしている地を開いて村としたことによる。文政六年（一八二三）播隆上人が笹島の観音堂を起点に村民とともに笠ヶ岳登拝を再興し、登山道を開いた。

ク 長倉（ながくら・上宝町長倉）

村名の由来は長い「くら（谷の意）」にちなむ。南向きの斜面に集落が立地し、日当たりが良い。板倉があり、集落の上方には棚田が広がる。

集落上部に臨済宗の桂峰寺があり、多くの文化財を所蔵する。桂峰寺から見る景色はすばらしく、また、棚田からは焼岳がよく眺望される。

ケ 岩井戸「杓子の岩屋」

（いわいど、しゃくしのいわや・上宝町岩井戸）

播隆上人が修業をした「杓子の岩屋」が集落後ろの山中にある。岩井戸集落から三～四十分の距離で、けわしい山道が途中にある。岩屋からは眺望がよく、本郷平が見える。

コ 見座（みざ・上宝町見座）

『後風土記』によると、村名は、集落の大橋が流れては困るので罔象女神（みずはのめのかみ）をまつり、「美豆波村」といったが、そのうち「見座」と書くようになったという。後風土記によれば、家数三十七軒、上宝村役場は見座にあった。交通の要衝でもあった。

サ 中山、双六（なかやま、すごろく・上宝町中山、双六）

高原川に合流する双六川の右岸が双六、左岸が中山集落である。双六を双六川に沿って北に進むと金木戸に至り、さらに北西へ進むと山吹峠を経て神岡の山之村（飛騨市神岡町森茂）に至る。

シ 東町

中山から県道 471 号を西方向に進むと、神岡町麻生野、殿、東町に至る。県道 471 号は、ほぼ旧街道沿いに、旧集落をつないで平湯から神岡へとつながっている。

『高山市史・街道編』高山市教育委員会 平成 27 年発行より